関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[書評] 白杉庄一郎著『独占理論の研究』

著者	杉原 四郎
雑誌名	關西大學經済論集
巻	11
号	3
ページ	303-309
発行年	1961-08-20
その他のタイトル	[Book-Review] S. Shirasugi, Studies in the Theory of Monopoly
URL	http://hdl.handle.net/10112/15512

書評

白杉庄一郎著『独占理論の研究』

杉原四郎

一

本書は、著者が一九五七年十月に発表した「独占資本主義のもとでの剰余価値の法則」という論文を冒頭にすえ、それ以後一九六〇年六月までに主題に関して書かれた一五の論文に未発表の二編を加え、それらにかなりの付註を追加しつつ全四章に編成されたものである。最初の論文は、本書全体の基礎理論であるが、著者はその成立過程について、「序」の中につぎのようにかいている。「前著『価値の理論』（一九五五年）の公刊後、私は理論経済学の分野では剰余価値の理論について勉強しなおしていたが、そのうち私は価値の理論を剰余価値の理論に発展させるについて一つの疑問に直面するにいたつた。というのは、『資本論』第一巻が主題としているような剰余価値の理論は現代独占資本主義のもとではどうなるか、ということであつた。いいかえると、現代資本主義の経済過程は、『資本論』第一巻が取扱つているような資本の直接的生産過程として見るとどうなるか、ということであつた。」このような著者の問題意識が一九五二年のスターリン論文に触発されたものであろうことは、現代資本主義の基本的経済法則を究明するために、「剰余価値の法則を具体化し、独占資本主義の諸条件にあてはめて、それをさらに発展させることが必要である」というスターリンの主張を、著者が冒頭の論文のはじめに引用していることからもうかがわれる。しかしそれと同時に著者の問題提起はスターリンのいわゆる最大限利潤の法則に関する見解に対する

根本的批判を意図するものであつた。すなわち、スターリンは最大限利潤の主要な源泉を国の内外の住民に対する権力的な収奪にもとめたが、このことは彼が現代資本主義の寄生的頽廃的側面を一方的に過大視したことと必然的な関聯があり、しかもこのような認識は単にスターリンだけにとどまらず、独占資本主義論の公式的見解を支配して来たものであつた。これに対して著者の独占資本把握は真向から対立する。一九五八年十月に発表され、本書の第四章第一節におさめられている「独占と産業技術の進歩」という論文は、このような従来の公式的見解に対する根本的批判を展開したものとして、本書全体をつらぬく著者の問題意識を理解する上にきわめて重要であり、本書によつてはじめて白杉理論に接する読者には、まず最初にこの論文を一読した上で、冒頭から順序に通読することをすすめたいほどである。

この論文で著者がのべていることは、現代資本主義における独占は、決して完全独占ではなく、独占的競争下にある寡占であり、そうである以上、理論的には、巨大企業間の競争によつて、いわゆる独占段階においても技術的進歩の可能性はのこされているということ、しかもそれは単なる可能性にとどまらず

事実をみても独占資本主義の成立期が同時に新産業技術の発生期にあたつており、以来一九三〇年代の大恐慌期においてさえ、技術的進歩は全然停止してしまつたわけではなく、それが第二次大戦中およびそれ以後になると、先進資本主義諸国の技術革新のめざましさは誰の目にもあきらかになつたのであるから、競争のもつ生産力増進作用は独占段階を通じ、強弱の差はあれ、一貫してはたらいていた以上、独占資本主義を単に寄生的・頽廃的なものとのみ考えることは許しがたい謬見である、ということである。独占が技術的進歩と両立しうるという主張は、しかし、決して著者特有のものではない。すなわち、本書第四章第二節以下で分析されている――そこではシュムペーター、ドラッカー、ギャルブレイスの三人がとりあげられている――ように、近代経済理論の中から、このような見解に立つ人々をとり出すことは比較的容易であり、とくにシュムペーターの『資本主義・社会主義および民主主義』（一九四二年）における、独占的大企業の革新者的性格を解明した所説は、著者によつて「独占資本主義の――特に第二次世界大戦前後のそれの――現実を説明する上で従来のあらゆるブルジョア理論にまさつた有効性をもつている」（二四九ページ）と高く評価されて

いるところであるし、マルクス経済学者の中にも、とくに一九五六年のソ連共産党第二十回大会におけるスターリン批判――フルシチョフがこの時にのべた「資本主義の全般的危機が完全な停滞・生産技術的進歩の停止を意味するというような考えは、マルクス＝レーニン主義者にとつてはつねに縁のないこと」だとする発言を、著者は「マルクス経済学の発展にとつて劃期的な意義をもつ」とかいている（二三二―三ページ）――以来、現代資本主義のもつ生産増強力を正当に評価すべきであるという新しい見解がつよまつて来た。著者の主張に特徴的なのは、独占資本主義が流通主義的・帝国主義的な寄生と頽廃の側面をもつと同時に、その反面において、にもかかわらず生産力を進歩させることにより社会主義を準備しつつあるという側面をも有していることを正当に把握するためには、独占利潤の基本的な源泉が生産過程にあることをあきらかにすることが必要であるということ、この場合の独占利潤論乃至独占価格論の展開は、独占段階においても単なる独占ではなく独占的競争が支配しているかぎり、自由競争段階に支配的であつた資本主義経済の諸法則と全く別個に行われるべきではなく、それのより高次な発展としてなされるべきであるということ、ヨリ具体的にいえば、マルクスが『資本論』第一巻（資本の生産過程）で展開している相対的剰余価値の生産を基礎としながらも、それよりも一段と次元の高い独占的剰余価値の生産に関する理論を中核とした新しい独占理論を創造する必要があるということ、これである。現代資本主義の基本的経済法則を把握することは、これ以外にはありえないというのが著者の理論的確信であつた。しからばいわゆる独占的剰余価値の生産とはいかなるものか。ふたたび本書冒頭の論文にもどらなければならない。

二

独占的剰余価値に関する著者の見解は、一見すると単純かつ明快である。マルクスが『資本論』第一巻第四篇第十章「相対的剰余価値の概念」の中でのべている特別剰余価値は、他に先んじて新技術を採用し例外的生産力を発揮しうる産業資本が、その技術が一般化しない間、当該商品の社会的価値と自己の個別的価値との差額として収得する超過利得の源泉なのだが、自由競争が支配的な資本主義下の工業においては、新技術は早晩一般化して社会的価値が低下し、特別剰余価値は消失する。しかるに独占段階に入ると、独占的大資本は同時に巨大かつ優秀

な生産設備の所有者であるが、この設備の発揮する例外的生産力によつて独占資本は特別剰余価値を享受することができるのみならず、同時にこの巨大施設が他の企業の追随を容易にゆるさず、新技術の一般化を阻害することによつて、独占資本による特別剰余価値の生産を固定化し永続化することを可能ならしめる。著者によれば、このような固定化された特別剰余価値こそ、独占的剰余価値となづけられるべきものである。『資本論』第三巻第六篇「超過利潤の地代への転形」があきらかにしているように、自由競争が支配的であつた時代においても、農業部門にあつては、社会的価値と個別的価値の差額が優良地の有限性のゆえに、固定的な超過利潤をうみ出し、これが優良地の所有者の取得する差額地代に転化するのであるが、独占的剰余価値は、「競争の制限にもとづく特別剰余価値の固定という点において、差額地代に通ずる本質をもつもの」（二一ページ）といわなければならない。ただ差額地代の場合は、もつぱら自然的条件の差異にもとづく優良な生産力に由来するのに対し、工業部門における独占的剰余価値は、優秀な施設によつて労働力が質的に向上し、それが支出する労働はマルクスのいわゆる「強められた労働」として作用することによつて必要労働時間

が短縮されて剰余価値率がたかまることになる。このようにして独占資本が自己の生産過程からつくり出した特別剰余価値が独占利潤の基本的源泉である。著者によれば現実の独占利潤はこの特別剰余価値と収奪利潤との二つの部分からなりたつている。収奪利潤とは流通過程的収奪や帝国主義搾取によつて獲得される利潤部分であつて、この部分にこそ独占利潤の基本的源泉があり、現代資本主義の特質がみられるとするのが従来の通説であつた。これに対して、収奪利潤が独占資本にとつて重要な意義をもつていることは認めつつも、それに焦点をすえそれを主軸として構成された理論では、現代資本主義の特質を決して把握することは出来ないというのが、著者のくりかえし強調するところなのである。

白杉理論の骨子はほぼ以上のように要約されるが、見られるように、それは『資本論』の基礎の上にくみたてられているのであつて、従つてマルクス経済学に対する一般的常識を前提とすれば、それを理解することはそれほどむつかしくはないように思われる。だが一歩たちいつてその内容を検討してゆくと、その意図は『資本論』の叙述を機械的連続的に現代の問題に適用するというのではなく、『資本論』の論理をその精神にそいな

がら弁証性的に発展させるところに、あるいは「『資本論』を閉ざされた体系と見ることに満足しないで、これを開かれた体系として独占段階の理論体系にまで拡充しようとする」（一七五ページ）ところにあるということ、そしてひとしくマルクス経済学の立場に立ちながら、白杉理論が従来の通説的見解とするどく対立せざるをえないのはまさにこの点に由来するということがあきらかになるであろう。この独創的見解を通説や他説と詳細に対照させながらできるだけ具体的実証的に展開することによつて、その説得力を高めようとする著者の努力は、本書の第一章にすでに十分あらわれており、学界に大きな影響力をもつているヒルファーディングとセレブリャーコフの見解についての吟味や、諸説の典拠とされる『資本論』第三巻の独占論に関する解釈の提示は、著者の立場を明確にする上に効果的であつた。さらに著者は自説を直接論評した諸家の所説はとくにくわしく紹介し、その批判点を逐一検討することによつて自説を一そう強化しようとつとめている。第二章におさめられた諸論文、すなわち通説的収奪利潤説の立場の重田澄男氏の批判と反通説的収奪利潤説の立場の平瀬巳之吉氏との批判とに対する反批判を主とするこの努力によつて、白杉理論の全貌は一般と明確化されたといつてよかろう。すすんで著者は、差額地代と特別剰余価値との共通性を主張する自己の見解を、両者の異質性を強調する通説的地代論と対比させ、通説の不備をつくことによつて自説をヨリかためるべく、宇野・向坂両教授の地代論を検討する。本書の第三章がそれであるが、著者はそこで、一方では、差額地代が「虚偽の社会的価値」とよばれるにもかかわらず、資本主義社会を前提とするかぎりそれなりの実体的基礎をもつていることを、価値現象が一定の社会的評価を本質的契機とするという独特の主張でうらづけるとともに、他方では、工業部門における特別剰余価値も社会主義社会から見れば一種の虚偽性をもつていることを、資本主義社会における価値および価格の平均原理の自己疎外という特異の主張によつて、証明しようとしている。そしてこのような著者の主張は、本書の公刊より六年前に、やはりマルクス経済学の創造的発展をめざして世に問われた『価値の理論』の中に体系的に展開されているところの、著者の価値論をささえる最も重要な理論なのである。してみれば、その独占的剰余価値論は、一見単純な外観を呈しているにもかかわらず、きわめて複雑であり独創的でありしかも全体として論理的な一貫性をもつたものであるといわなけれ

ばならないであろう。

三

一で見たような問題意識と二で見たような論理構造ともつている白杉理論を、個々の論点にそくしてヨリくわしく分析することは省略し、最後に、本書に対する全般的な感想をしるしておこう。「独占体相互間の激烈な競争を残して不完全独占として特徴づけられうる現代的独占の取得する超過利潤のすべてを、完全独占の場合に可能であるような流通過程的ないし経済外的な搾取によつてのみ説明するのは、誤りである。そういう部分がけつしてないわけではないが、基幹的な部分はそれ自身の生産過程をもつのでなければならない。そして現代資本主義の基本的矛盾が暴露されうるのは、そこからである」（五四ページ）。著者のこの主張には全く同感である。ヒルファーディングに由来し、セレブリャーコフによつて補強され、スターリンによつて拡大再生産された収奪利潤説が、マルクス経済学界の通説となつているときに、あえてこの説が提起されたということを考えれば、単なる同感だけでなく、同時に深い敬意をおぼえざるをえない。そして著者とともに独占利潤の源泉を「それ自身の生産過程」にもとめてゆくかぎり、固定化された特別剰余価値にゆきつくことは、おそらく論理的に必然の結果であろう。そしてその反動的側面のみを機械的に過大視するかたよつた独占資本主義観にわざわいされて、従来不当に軽視されていたこの点を表面におし出したことは、著者の積極的な貢献として、白杉理論に重要な疑義をさしはさむ論敵たちによつてもすでに承認されているところであつた（たとえば重田澄男「独占利潤の基本的源泉について――白杉理論批判――（二）」（『経済論叢』・第八四巻第四号・一九五八年十月）五六―七ページ本間要一郎「競争と平均利潤の法則」（『経済研究』・第一一巻第二号・一九六一年四月）一一六ページを参照。）

このことを確認した上で、白杉理論にのこされた課題として最も重要な問題点を指摘するとすれば、それは独占利潤を構成する二つの契機である特別剰余価値と収奪利潤との間の相互関係の究明であろう。両者はその源泉から見ても作出の方法から見ても全く異質的な別個の範疇であるが、独占利潤の現実的な追求の過程においては、それらは決して無関係ではありえない。それどころか、巨大な施設による特別剰余価値の生産には一方では長期的に安定した市場支配が必要条件であり、他方で

は資本構成の高度化にともなう利潤率低下の圧力に対抗しうる利潤源によつて、経営を強化することもまた肝要であるが、独占的地位を利用しての収奪利潤の獲得は、まさにこのような意味において特別剰余価値の追求を補完する作用をするものといわなくてはなるまい。流通過程の支配だけにとどまる価格つりあげ政策の不安を克服するために独占資本はどうしても生産過程の支配にまですすまざるをえず、その支配的地位をたもつためには、一定の需要をうばいあうだけではなく生産力の増大によつて新需要をつくり出す能力を必要とする意味において、収奪利潤の追求は特別剰余価値の生産をヨリ基本的な活動として必然的に前提しなければならないということは、本書においても説かれているけれども、特別剰余価値の生産が収奪利潤の追求によつて媒介されるというその逆の補完関係は、ほとんどふれられていない。著者もおそらく独占利潤を独占資本の総過程の見地から包括的体系的にとりあげる場合には論及される筈と思われるが、この点を解明することによつて、おそらくは白杉理論と通説的見解との対立のすくなからぬ部分が解決されると期待されるのみならず、独占資本による特別剰余価値の生産と産業資本によるそれとの異同がヨリ明確となり、独占資本の生産点において、現代資本主義の基本的矛盾を暴露しようとする著者の意図は、一そうよく達成されることになるのではなかろうか。

× × ×

本書の公刊後二ケ月にして著者は病をえて急逝した。体系的な独占資本論を「いつの日か書きあげたい」という希望がその序にしるされているが、みずからの手でついにそれをはたしえなかつたことは、著者にとつておそらく最も大きなこころのこりの一つだつたろう。その為の準備にすでに尨大な草稿が書きためられていたことを知るにつけても、その思いがふかい。痛惜のきわみである。